〔問題一〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

みなさんが学校におられる期間は、親や先生にすがって、その助けによって、指導によって一人前になり、自分で歩み出す、精神的にもそれが始まっている、最後の仕上げの大切な時期だと思います。先生方もそういう生徒に、立ち会っておられると思います。

そういうときにいちばん大事なことは、これまで行われてきたことに対して感謝したり、A ヒハンしたりすることは、もちろん大切ではあるけれども、自分の責任において物事を考えて歩んでいくことです。そのために、今まで自分をしばりつけていたものに無関心になる、そういうものからはなれていくことがなければなりません。そのようにならせる教育が、①ほんとうの教育だと思います。

実は今から十七、八年前に、日本に帰ってきたときに、本郷にある、ある有名な小学校のＰＴＡからよばれて、何かフランスの話をしてくださいということで、お訪ねしたわけですが、ＰＴＡを強化するにはどうすればよいかというのです。お母さん方や先生方が全部集まって、そういう話をするのです。私は破壊的なことを言うのではありませんが、私は②ＰＴＡは強化されないほうがよいと思います。

というのは、それだけ言うと誤解を受けますけれども、自分が生徒であったときのことを考えますと、家で親が自分に対して 1 理解な態度を示す場合には、学校に行って先生に訴え、いろいろ慰められたり、教えられたりして、自分の態度を考えるわけです。

理不尽な先生がいれば（実際、先生というものは知らないうちに、えこひいきをしていることが多いものです）、家にとんで帰って親に話す。場合によっては親が校長先生に言いつけに行くこともある。そのようなことによって子供は、家には学校と別の社会があり、学校には親と別の人間がいて自分を導いてくれることを知るわけです。学校で困ったことがあれば、家に帰って親に話せば、親は自分のことをわかってくれます。その親と先生とが結託したら、子供は行く所がありません。

これは非常にB アブないと思います。それに気づかず、みんなで結託し、情報を集め、子供を駄目にしてしまう。そのような親と先生の関係というものは、精神の発達のために、非常によくありません。私の考え方が間違っているのかもしれません、極端かもしれませんが、そういう点をもう少しはっきりとして、親は親で自分の考えをはっきり持ち、先生は先生で自分の考えをはっきり持つことが大切だと思います。

もし親と先生が相談するとすれば、生徒の健康について、Ⅰ 生徒が病気の場合に、家でどれくらい勉強するか、学校ではどれくらい勉強するのがよいかということで、連絡するのはいいのですけれども、子供の心構えをどうしようとか、精神生活の基礎はどうしなければならないか、ということまで考えるのは、非常によくありません。

C フコウにして日本のやり方は、すべてについてそういうことが言えるわけです。すべての人がよく知りすぎているわけです。このことが、私は、いろいろなことにおいて、日本の近代化というものを妨げているのではないかと思います。

私は先生と親が生徒のことで、話し合うことにけっして反対するわけではありません。問題は内容です。子供のほんとうの目的は、 2 になることです。それ以外に何の目的もないわけです。もし子供を総理大臣にしたいという親がいるとすれば親が間違っている。自分の生徒を何パーセント有名校に進学させるかということを目標に掲げている先生がいるとすれば、その先生が間違っている。もし親と先生とが相談することがあるとすれば、 2 の完全な人間にすること、それ以外に何もあってはならないと思うのです。

そういうことであれば、何も打ち合わせる必要はありません。わかりきったことです。Ⅱ 、具体的なことについて、食物とか健康とか、そういう問題についてなら相談することはあるし、打ち合わせすることはよいと思います。しかし、どうもそうではない。すべて他人は自分にとって汝であり、自分は他人にとって汝であり、みんな、あなた — あなたの関係であり、みんなが連絡しようとしています。これが、日本の指導のいちばん大きな

欠陥というか、困った点というか、③人間関係の大きな問題です。それは日本だけでなく、ヨーロッパにもあります。しかも特に日本においては大きい割合を占めています。私は、ここで一つの例をあげましょう。

それは子供のしつけという問題です。あるいは教育といってもいいです。若い人の教育です。このごろの子供は、しつけがないというわけですが、ヨーロッパのしつけは実にやかましい。日本では子供が入ってくると、さあお嬢さんお座りなさいと言って座らせます。「おいくつ」とか、「お嬢さんかわいいね」とか言って、頭をなでるわけです。できるだけのことを、子供にするわけです。

ヨーロッパではバスや電車の中で、子供には絶対席を譲りません。立たせてしまう。Ⅲ、子供は一人前の料金を払っていないからです。それだけ聞くと、何ということだと思うでしょうけれども、子供はそのように育ってゆかなくてはならないと思うのです。世の中に出たら、そこは家の中ではないのだから、その席に座るためには金を払わなければなりません。バスの会社も金を取らないのだから、ただで乗せてもらっている以上は、座る資格はありません。

子供だからということは、いっさいどけて考える。これが一般的な社会通念です。そのような、ある意味で

3 人間的といえるような目に合わせ、子供にそういうことを知らせます。またおとなの集まる場所へは、子供を連れてゆかない。連れていく場合には、やかましくしつけて無駄な手のかからないようにします。

④日本はまるで子供の天国のようなものです。この間、飛行機で日本に帰るときに、非常に困ったことがおこったのです。がら空きの飛行機で、そこに三、四人の日本の男の子が乗っていまして、何か急用がおこったときに、客室乗務員を呼ぶためのブザーを鳴らして、遊ぶのです。それを親は脇で見ていて何もしないのです。平気で週刊誌を読んでいるのです。これは特別悪い親だと思いますけれども、向こうではこういうことは、絶対に考えられません。

このことは日本人は飛行機の中であろうと、みな自分の家の庭のように考えているからです。つまり自分と親とが特別な関係であり、先生と生徒は特別な関係であり、自分をかばってくれるということであり、みんな互いに

あなたという名前で呼び合っているからです。あなたというのは、親しい関係の人たちです。日本で重大なことは、その互いの関係というものが、このような内容を持っているということです。

たとえば、ここにAという人がいるとして、私をBとします。AとBとの関係が成り立つということは、必ず一方が他方を教えるとか、保護するとか、つまり親しくなければ成り立つと言えません。権威を持っている者とそうでない者との関係です。たとえば、親と子、先生と生徒、先輩と後輩、同じ仲でも経験のある人とない人というように、つまり社会に行われている上下関係を、そのまま全部移しているのです。それに賛成し、それに従い、しかもあなた、あなたという関係で生きているのです。これは非常に複雑で簡単に話せませんが、東京大学の中根千枝先生が、タテ社会の人間関係という言葉で言っておられますが、これは単に家庭や学校だけでなく、日本全体がそれで覆われているわけです。

私が自分として独立していない、自分と別な人間がいることを忘れて、自分と同じ関係でしか他の人を見ない、しかも互いに一方が一方を保護し、一方が保護される、お互いに甘え、甘えられるという関係によりかかっています。しかもそういう関係は、お互いの人間としての価値によるものではなく、相手は先生であって自分は生徒であり、下である、相手は大臣であって自分は局長に過ぎない、相手は何であって自分は何であるというように、人間の価値とは何の関係もない社会の階級とか階層とか、そういうものが個人の中に入ってきて、その上に立って私 ― あなたの関係が成り立っています。そういうものが個人的な私 ― あなたの関係として癒着している、それがいたる所で行われているのです。

法律問題一つ考えてみても、法律の条文というものは、自分以外の他の人は、みんな第三人称になっているのです。相手が親であろうと誰であろうと、法律が規定していない以上は、一人の人間として対する以外にはないわけです。親を親として扱うのは、法律がそう規定しているからで、第三者と何も違わないわけです。法律は社会生活、社会組織の根本です。社会は、その法律によって規定されています。法律で規定されているということは、一人称である自分と三人称である他人が集まって、生活しているということです。

だから、あなた―私の関係は⑤そこでは通用しないということです。そういうものに向かって人間をならす、強力なものに向かって人間を練成していくもの、それが、ヨーロッパでいう、しつけです。そのことが日本ではほとんど組織的になされていません。そこに大きい問題が、あると思うのです。この問題は詳しく述べれば、いくらでも述べることができますが、とくに⑥日本の言葉の問題に関連させて言うことができます。

日本語は非常に面倒なものです。ここに一冊の本があるという場合、英語では This is a book と言う。これはエリザベス女王でも、誰であっても同じです。ところが日本の場合、たとえば天皇に対していう場合、「これは本である」とは絶対に言えません。「これは本でございます」と言わなければなりません。先生に向かっては、「これは本です」と言っても、お父さんに向かっては、「これは本だよ」と言うわけです。全部違うわけです。

これはけっして言い方だけの違いではなくて、内容にまで及んでくるのです。つまり自分とあなたという関係で、規定しているわけです。私というのはあなたに対する私になっていて、本来の自分がどこかにいってしまう。

ピアノをやっていても、コンクールで一等になるためというようなことで、すべてやっているわけです。それで何のためにピアノをやっているのか、自分自身の必要ということは完全に失っています。百パーセント客観的な価値に立ってやっています。タレントになるために、テレビに出るためにやっている。一度テレビに出れば死んでもよいと思わなくても、それに近いことを考える。そのように自分というものは忘れてしまっています。

同時に、人も自分が自分であることを忘れてしまっています。⑦ヨーロッパにおいては、この問題が非常にはっきりしていて、個人の独立、個人の好みの自由、個人の責任というものと共に、一人一人の人間がこうなのだということを考えるのです。

ということは、つまり一人一人の人間が、単にお父さんだけのあなたではないのだということ、その人自身の私を持っているということです。他人を、自分にとってのあなたとばかり、思ってはいけません。他人は自分とは別の自分を持っていることを、尊重しなければならないのです。そうした個人が集まっているのが社会なのです。そういう考え方が、ヨーロッパの今日を、形づくってきているわけです。そういう方向に向かって生きてゆくことが、

進歩と言われてきたわけです。私的な、あなた的な関係がだんだん消され、公的な関係になっているのです。

たとえば工場の資本家と労働者が、親分・子分という個人的な関係でなく、お前・おれという関係でなく、主人は主人なりの責任と役割を持ち、また労働者は働く義務と責任を持っているという関係が法律によってきちんと結ばれています。それを良心的に果たしていく。その上で人間関係が、できるならばできてもよい。そういうことがヨーロッパの文明進歩というものを、形づくっています。

なぜヨーロッパが、進歩しているのかといえば、そのような自己の確立、また他人の自我の確立が進んでいるからだといえます。そこを確立してこそ、自由を求めることが確実になるのです。そのことを離れては、独立も自由も単なる言葉にすぎません。子供が使いたいおもちゃを使うことが自由であり、独立であるならば、他の子供がそれを使うことを怒るわけですから、他人の自由、独立を認めていないわけです。

そのような深いヨーロッパの人間関係というものは、非常に深くキリスト教によって養われてきたのです。唯一の神を信ずる、その神の前にはすべての人間が平等であるということを考えることによって、できあがっています。すべての人間が、神の前に平等であるということを、まじめに考えることによって、つくられているわけです。

私たちが今問題としている点は、まさに歴史のいちばん根底に入ってくる問題でもあります。進歩という考え方、独立、自覚、自尊心、それらのものが、キリスト教と結びついていると思います。

（森有正『いかに生きるか』より）

（一）――線部①「ほんとうの教育」とありますが、それはどのような教育ですか。本文中の表現を用いて五十字以内で答えなさい。ただし、句読点も字数にふくめます。

（二）＝＝線部A「ヒハン」、B「アブ（ない）」、C「フコウ」を漢字に改めなさい。

(三) [1]、[3] に入れるのに最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくりかえし用いてはいけません。

ア 非　イ 未　ウ 不　エ 無

(四) [Ⅰ]～[Ⅲ] に入れるのに最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくりかえし用いてはいけません。

ア つまり　イ たとえば　ウ だから　エ しかも　オ なぜならば

(五) [2] に当てはまる言葉を、本文中から三字でぬきだしなさい。ただし、[2] は本文中に二か所あります。

(六) ―― 線部②「PTAは強化されないほうがよい」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 親子の問題は親と子だけで、学校での問題は先生と生徒だけで解決すべきものであるから。
イ 子供を親と先生とが協力しあって育てるということが、フランスでは全くなかったから。
ウ 親と先生の考えが同じになってしまうと、子供の味方が誰もいなくなってしまうから。
エ 親と先生の関係が緊密になると、今後ますますお互いの負担が増えていってしまうから。

(七) ―― 線部③「人間関係の大きな問題」とありますが、筆者はどのようなことを問題だと考えていますか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手が誰であろうと、自分と親しい間柄の人間だと思いこむ人が多数いること。
イ しつけられていないせいで、他人への気づかい方を知らない人が多数いること。
ウ 甘やかされて、将来のことを見すえた教育を受けなかった人が多数いること。
エ 自分を中心に考えて、周りの人のことを考えずに行動する人が多数いること。

(八) ―― 線部④「日本はまるで子供の天国のようなものです」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 周りの大人が甘いので、子供は好き放題にふるまえるということ。
イ 家の外に出ても、子供は家の中のように落ち着いて過ごしているということ。
ウ 楽しいことが提供されるものだと考え、子供は自分で工夫しないということ。
エ 周りの大人が守ってくれるので、子供が安全に過ごせるということ。

(九) ―― 線部⑤「そこ」の指している内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 法律　イ 社会　ウ 学校　エ 組織

(十) ―― 線部⑥「日本の言葉」とありますが、本文で説明されている日本語の特徴として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア はっきりとは言わないため、相手を不快にさせることが少ない。
イ 理解を求めることは二の次にした、主観的な表現が好まれる。
ウ 立場の違いがあって気をつかうため、上下関係を表す表現が多い。
エ 自分と相手との関係が、言葉の内容にまで及んでいる。

(十一) ―― 線部⑦「ヨーロッパにおいては、～考えるのです」とありますが、ヨーロッパの人はなぜそのように考えることができるのですか。その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア キリスト教の教えが浸透していて、親や先生が子供に対して果たすべき使命が明確になっているから。
イ 社会は法律のもとに成り立っており、法律を守るのが人としての義務だと思っているから。
ウ すべての人間が平等であるというキリスト教の教えによって、自我の確立が進んでいるから。
エ 子供に対して厳しい教育を施すことによって、他人とは違う自分というものを持てるようになるから。

〔問題二〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

秋元路男は製麺工場を定年退職した後、ＪＲ大阪環状線のとある駅のホームにある立ち食い蕎麦店の店長をしている。妻の恵子はすでに亡く、息子の正雄は東京で家族と暮らしている。

今から五年前、正雄は当時小学四年生だった息子の弘晃に中学受験のための勉強を無理強いする。幼い弘晃が疲れて弱っていく姿を見かねた路男は正雄と激しく言い争い、二人は絶縁状態となって、路男は孫の弘晃とも会えなくなる。

そして現在。中学三年生となった弘晃が家出をし、突然路男の前に現れる。路男は何も聞かず弘晃を一人で暮らすアパートに泊めてやる。

翌日、弘晃は働く祖父の姿を一日中店の外から眺めていた。

駅蕎麦屋は大抵、午後六時半頃に幾度目かの混雑のピークを迎える。八時になれば客足は少し落ち着き、アルバイトの山本君も帰って、あとは閉店まで路男がひとりで店内をＡ切り盛りするのだ。

その日の最後の客は、八十を超えたと思しき男性だった。常客というほどの頻度ではないが、杖を頼りにひとりで閉店間際にかけ蕎麦を食しに来るので、路男も自然と顔を覚えていた。

「毎度、どうも」

「身体が温もったわ、おおきに、ご馳走さん」

暖簾をしまいがてら送って出た路男に、人生の先輩は控えめな笑顔を向けた。

「今日は年金が出たさかいに、たまの贅沢なんや。二か月後の十五日まで、また何としても生き延びて、ここに来さしてもらわなな」

切実な祈りの混じる声だった。

偶数月の十五日は、高齢者にとっては命綱をつなぐ大事な日であることを、路男は思い返していた。

若い頃にはわからなかったが、年金のみで暮らしを紡いでいく難しさ、しんどさは、路男にも充分に＊忖度できた。それでもまだ年金を受給できるだけマシ、との思いを高齢の受給者なら持ち合わせているだろうことも、路男は知っていた。

「寒いですよって、風邪に用心して、また次もお待ちしてますさかいに」

「おおきに。ほな、良いお年を」

老人は杖を持ち直して、路男に軽く会釈してみせた。

雑踏の中を遠ざかるその後ろ姿を見送って、ふと視線を廻らせば、すぐ脇の柱の陰から、弘晃が同じように先の老人を見送っているのが目に入った。

弘晃、と路男は孫の名を呼ぶ。

「えらい寒いのに、待っててくれたんか」

労う声をかけてＢ相好を崩す祖父に、弘晃はただ黙って俯くばかりだった。

後片付けを終えて、孫と肩を並べて家路に就く。月のない夜、ネオンが明るすぎて、星の姿は全く見えなかった。

飲食店が軒を連ねる繁華街は、忘年会の客で溢れ、騒々しいばかりだが、そこを抜ければ意外に閑静な通りに出る。シャッターの降りた印刷工場の脇を通っている時、弘晃がぼそりと呟いた。

「①ジィちゃんさぁ、虚しくなんない？」

「何が？」

路男は孫の問いかけの意味を汲みかねて、首を捩じって弘晃を見上げた。

祖父の視線を避けて、昏い眼差しを路上に落とし、ひと呼吸置いて弘晃はこう続けた。

「駅蕎麦を食べに来る客ってさ、別に、料理に期待してるワケでもないし……。手っ取り早く食欲満たしてるだけじゃん」

「ええやんか、それで」
路男は大らかに応え、立ち止まった弘晃に構わず、先に歩を進める。
でも、と弘晃は大股で追いつくと、
「でも、やっぱ駅蕎麦は、ちゃんとした食堂とは違う。虚しいよ、やっぱ」
と、挑む口調で祖父に伝えた。
そして、祖父の返事を待たずに、足もとの空き缶を勢いよく蹴り上げた。まだ少し中身の残っていた空き缶は、四方に液体を飛ばしながら闇の奥へと消えていく。

火の気のないアパートの一室に戻ると、路男はそのまま台所に立った。
弘晃はあれからずっと、［1］と黙り込んでいる。電気コタツのスイッチを入れることさえ忘れている孫に、路男は、
「今、夜食つくるよって、温うして待っとき」
と、声をかけた。
身を屈めて冷蔵庫を探ると、賞味期限が明日までの茹で蕎麦が二袋、残っていた。ネギを小口に切り、蒲鉾は大きく斜めに削ぎ切りする。
「虫養い、いう言葉が大阪にはあるんや」
出来上がった二人分の蕎麦を電気コタツの上に並べて、路男は弘晃に語りかける。
冷えた室内に、丼からはほかほかと柔らかな湯気が立っていた。
「ムシヤシナイ？」
どんな文字をあてるのか、皆目見当もつかないのだろう、外来語にしか聞こえない口調で、弘晃は繰り返すと、熱い丼に手を伸ばした。ああ、と祖父は頷き、孫のために瓢箪型の七味入れを取ってやる。

「軽うに何ぞ食べて、腹の虫を宥めとく、いう意味や」
「ふーん」
興味の湧かない声で応えて、弘晃は熱々の蕎麦を口に運ぶ。一口すすって気に入ったのか、ズズズッと美味しそうに食べ進めた。
目を細めてその様子を眺めていた路男だが、ゆっくりとした仕草で急須を取り上げ、茶葉にポットの熱湯を注ぐ。
「今日みたいに寒い日ぃは、湯気がご馳走や」
湯気の立つ湯飲みを孫の手もとに置いて、祖父はさらに続けた。
「帰ればご飯が待ってる。時間さえあれば、ゆっくり食事が出来る。懐に余裕があったら、派手なご馳走も食べられる。でも今は、そういうわけにいかん。せやから、取り敢えず駅蕎麦で虫養いして、力を補う――そういう虫養いを、ジィちゃんは大事に思うんや」

*

②話の途中から、弘晃は箸を止めて、じっと祖父の双眸を見つめていた。聞き終えて、何か言いたげに弘晃は唇を開きかけ、しかし、またきゅっと一文字に結び直した。
路男は、手もとの湯飲みを手に取って、温もりを確かめるように掌で包むと、こう言い添えた。
「それになぁ、お前の言う『ちゃんとした食堂』ばかりなら、世の中、窮屈で味気ないと思うで」
祖父のその台詞に、③孫ははっと両の瞳を見開く。
トゥルルル
トゥルルル
秋元家の電話が鳴ったのは、丁度その時だった。咄嗟に弘晃がぎくりと身を固くする。勧誘か間違いか、あるいは悪戯でしか鳴ることのない電話だったが、その受話器に、路男は躊躇いなく手をかけた。
「はい、秋元です」

名乗ったあと、受話器の向こうの声を聴いて、路男は唇を僅かに歪めた。思った通り、電話の主は東京の正雄だったのだ。弘晃が家を出て二日、正雄は漸く、息子の立ち寄り先として大阪の路男のことを思い出したのだろう。

無沙汰を詫びるでもなく、老父の暮らしぶりを尋ねるでもなく、 [2] に弘晃の消息を問う正雄に、路男は苦い表情のまま答える。

「ああ、弘晃なら来てるで。暫くうちで預かるさかい。……えっ？　何やて？」

視野の隅に、C固唾を呑んで様子を窺う弘晃が映っている。路男は身体ごと電話に向き直り、声を低めた。

『『勉強が遅れる』て……お前、それ本気で言うてんのか」

恵子が生きていれば、上手にとりなしたかも知れない。だが、路男は良い齢をした息子のあまりの愚かさに、このド阿呆！　と受話器に向かって罵声を浴びせていた。

「おんどれは父親のクセしてから、子供を潰す気か。いっぺん目ぇ覚まさんかい！」

がしゃん、と怒りに任せて受話器を叩きつけたものの、煮えたぎった憤怒はそう簡単には路男から去らなかった。

音のない一室に、古い掛け時計の秒針だけが妙に大きく響いている。

振り返り、孫の様子はと見れば、弘晃は卓上に置いた握り拳を [3] と震わせていた。必死で感情の爆発に耐えているその姿を目にして、路男は黙り込んだ。

どれほどそうしていただろうか、弘晃が、オレ、と掠れた声を絞り出した。

「オレ、親父を殺すかも知れない」

部屋の空気が一瞬、薄くなった。

弘晃が苦悩の果てにその台詞を口にしたことが容易に察せられて、路男は敢えて無言のまま、真剣な眼差しを孫へと向けた。

弘晃は右の拳で唇を覆い、くぐもった揺れる声で打ち明ける。

「目の前に包丁があると、親父を刺しそうな気がして息が出来ない。いつか自分で自分をコントロール出来なくなる。そしたら……」

弘晃の肩が、上腕が、小刻みに震えだした。双眸に激しい怯えが宿り、うっすらと涙が膜を張っている。

「そしたら、オレ……親父を……」

「弘晃」

見かねて路男は孫の名を呼び、その背中に手を置いた。

刹那、下瞼で辛うじて止まっていた涙が、色の失せた頬へと滑り落ちる。

「ジィちゃん、オレ……自分が恐い」

恐くて堪らない、と言葉にすると、弘晃は両の掌を開いて顔を覆った。

④怯えの根源を口にしたことで、弘晃を支えていた何かが崩れたのだろう。十五歳の少年は、電気コタツの天板に突っ伏して慟哭した。

午前零時過ぎ、終電後の駅蕎麦屋へ路男は弘晃を連れて行く。手には深夜スーパーで買い込んだ大量の青ネギが抱えられている。

営業中は圧倒的な存在感を誇っていた駅蕎麦屋も、商いを終え、照明も落ちてしまえばD影が薄い。

ほんの数時間前にかけた鍵を外し、明かりをつけると、路男は弘晃を厨房に招き入れた。

落ち着かない様子で店内を見回す孫には構わず、ネギの根を落とし、流しで洗って俎板に束ねて置き、包丁を添えた。

「さて、と。弘晃、こっちおいで」

声をかけられて、祖父の方へ向き直った弘晃だが、俎板に置かれた包丁を認めると、ぎょっとして両の肩を引

いた。
「ジィちゃん、オレ、包丁は……」
両腕を後ろに回して身を強張らせる弘晃に、路男は緩やかに頷いてみせる。
「大丈夫、ジィちゃんが手ぇ添えたるよって」
祖父に言われて、孫は俎板の前に立つと、恐る恐る包丁の柄を握った。朴の木を用いた白い柄を、しかし、弘晃は掌に包むだけで精一杯の様子だった。
「もっとしっかり握らなあかん、かえってあぶないで」
こうするんや、と路男は孫の手に自分の手を添え、がちがちに固まった指を解して、正しく持たせた。
「せや、『小峯にぎり』いうてな、この持ち方を覚えたら、これから先、色々と役に立つ」
そうして、ネギに刃をあてがうと、
「よっしゃ、ほんならネギ切ってみよか」
と命じ、手を添えたまま刻み始めた。
切りたくない、との思いが弘晃の腕を重くする。難儀しながらも、路男は弘晃を導き、さくっさくっとネギに刃を入れていく。
「口に障らん厚み……これくらいの小口切りにな。ほな、自分で切ってみ」
見本を示すと、祖父は孫の右手を解放した。
必死のa形相で、弘晃は包丁を握り締めて、ネギを刻む。ざく、ざく、とぎこちない包丁遣いは、しかし、暫くすると、さく、さく、と徐々に柔らかな音へと変化していった。それにつれて、弘晃の身体の強張りは取れ、表情も少しずつ穏やかになっていく。
「いくつもの塾をかけ持ちして、実力以上の中学に受かった。けど、入ってみたら秀才がゴロゴロ。授業についていくのがやっとだった」

路男はただ無言で、孫の打ち明け話に耳を傾ける。
「親父には努力が足りない、と殴られてばかり。でも、足りないのは努力じゃなくて、［　］だったんだ。三年通ってそれが身に沁みた」
自身に言い聞かせるようなb口調だった。
たかだか十五歳で、自身の人生を諦めた様子の弘晃の姿が、路男には胸に応える。それに耐えて、祖父は孫の包丁遣いを見守った。
さくっさくっ、という包丁の音は、何時しか、とんとんとん、と軽やか音色へと育っていた。俎板の上で包丁がリズミカルに踊り、正確な厚みでネギが刻まれていく。用意したネギの束もそろそろ尽きようとしていた。
「仰山できたなあ、おおきにな、弘晃」
業務用の笊に山盛りになった刻みネギを示して、路男は弘晃に笑みを向けた。
「上手いこと使えるようになったな。――もう大丈夫や」
孫に手を差し伸べ、弘晃の右手を包丁ごと、自身の両の掌で包み込む。包丁の刃先が路男の腹を向いているのを知り、弘晃は怯えた目で祖父を見た。
「弘晃、⑤お前はもう大丈夫やで」
逃れようとする孫の手をしっかりと握ったまま、路男はぎゅっと目を細めてこう続けた。
「包丁は、ひと刺すもんと違う。ネギ切るもんや。この手ぇが、弘晃の手ぇが覚えよった」
「あ……」
弘晃の瞳に涙が浮き、瞬く間に溢れだす。堪えようとして堪えきれず、戦慄く唇から嗚咽が洩れ始めた。
心配要らん。
弘晃、もう何も心配要らんで。
号泣する孫の背中を撫でながら、祖父は幾度もそう胸のうちで繰り返した。

翌日の昼過ぎ、乗降客の行き交うホームに、弘晃と路男の姿があった。
駅蕎麦屋の制服に前掛けを締めた路男の姿はひと目を引きそうだったが、案外、気に留める者は居ない。
乗車を促す笛の音が響いて、弘晃は祖父を振り返った。
「親父とちゃんと話すよ。色々、ほんと色々、ありがと、ジィちゃん」
来た時とは別人のような、晴れやかな笑顔だった。路男は大きく頷いてみせた。
「気ぃつけてな、弘晃」
「また来るから」
弘晃が電車に乗り込んだ瞬間、プシューツと間延びした音がして、扉が両側から閉じられようとした。
扉が閉まる直前、弘晃が早口で言った。
「⑥ムシヤシナイさせてもらいに、オレ、何度でも来る」
孫を乗せた電車がホームを出て、その姿が消えてしまうまで見送ると、路男はぼそりと呟いた。
「ムシヤシナイ……何やあいつが言うと、外国語に聞こえるがな」
声に出してみれば、胸に宿っていた寂しさが消えて、路男は［4］と笑い声を上げる。
次の電車の入線を告げるアナウンスが、師走のホームに響いていた。

（高田郁「ムシヤシナイ」より）

＊忖度…他人の心の中をおしはかること。
＊双眸…両方のひとみ。両眼。

（一）　‖　線部a「形相」、b「口調」の読みをひらがなで答えなさい。

（二）　〰　線部A「切り盛りする」、B「相好を崩す」、C「固唾を呑んで」（固唾を呑む）の意味として正しいものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A「切り盛りする」
ア　物事を慌ただしくとりおこなう
イ　物事をうまくさばき、処理する
ウ　物事をいい加減に片付ける
エ　物事をていねいにとりあつかう

B「相好を崩す」
ア　気の毒そうな顔つきになる
イ　心配そうな顔つきになる
ウ　にこにこした顔つきになる
エ　不満そうな顔つきになる

C「固唾を呑む」
ア　恐怖のあまりまったく身動きできなくなる
イ　いったい何が起きているのかと心配する
ウ　どうなることかと緊張して一心になりゆきをみる
エ　何が起きても大丈夫なように心の準備をする

（三）　［1］、［3］、［4］に入れる語として最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1…〈ア　しんみり　イ　うんざり　ウ　げっそり　エ　むっつり〉
3…〈ア　わなわな　イ　ぶらぶら　ウ　あたふた　エ　がたがた〉
4…〈ア　けたけた　イ　からから　ウ　へらへら　エ　うはうは〉

（四）　［2］には「いきなり本題に入ること」という意味を持つ言葉が入ります。その言葉を漢字四字で答えなさい。

（五）〰〰 線部D「影が薄い」の意味を説明した次の文の［　　］に当てはまる漢字三字の言葉を本文中からぬき出しなさい。

［　　］がない。

（六）―― 線部①「ジィちゃんさぁ、虚しくなんない？」とありますが、この時の弘晃の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　料理に何かを期待されることもなく、ただ手軽に客の空腹を満たすだけの仕事に意義があると思っているのかどうか、祖父に確かめたいと思っている。

イ　祖父がどれほど忙しく働いたところで、立ち食い蕎麦屋にはしょせん手軽さや安さしか求められておらず、売上もたいして上がらないはずだと思い同情している。

ウ　手軽さだけが求められている立ち食い蕎麦屋の仕事は、だれにでもできる単純なものでしかなく、そのような仕事しかできない祖父を気の毒に思っている。

エ　料理自体に期待されていないからといって、祖父が客との会話や交流を楽しもうとしているのは、仕事のあり方として間違っていると考えている。

（七）―― 線部②「話の途中から、弘晃は箸を止めて、じっと祖父の双眸を見つめていた」とありますが、この時の弘晃の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　始めは祖父が何のために話をしているのかわからなかったが、自分の悩みを解消しようとしてくれているのだと気づき、感謝する気持ちになっている。

イ　始めは祖父が何の話をしているのかわからなかったが、自分の問いかけに応じたものであり、大切なことを話そうとしているのではないかと感じ、しっかり聞こうとしている。

ウ　始めは知らない言葉に対する単なる説明だと思っていた祖父の話が思いのほか面白く、この後どのように続いていくのかと期待している。

エ　始めはただ単に言葉の意味を説明しているだけだと思っていた祖父の話が、考えようによっては人生の教訓になるものだと気づき、もっと真面目に聞こうと態度を改めている。

（八）―― 線部③「孫ははっと両の瞳を見開く」とありますが、弘晃は路男の言葉をどのような意味として理解しているのですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　食堂も一種類だけでは選択の余地がなく、食事が味気なくなってしまうように、いろいろな生き方をしている人がいないと、人とつきあうことの面白味もなくなってしまうという意味。

イ　食堂にもさまざまなあり方が求められているのと同じように、人にもさまざまなあり方が求められているのだから、何か一つでも他の人と明確に違う特徴があればよいのだという意味。

ウ　食堂とひとくちに言ってもいろいろなものがあり、それぞれが世の中で役に立っているのだから、人のあり方や生き方もいろいろでよく、どのような人にも価値があるのだという意味。

エ　食堂にもいろいろな種類があり、客のさまざまな求めに応じられるようになっているのだから、人も他人からのさまざまな要求への対応力を身に付けなければならないという意味。

（九）―― 線部④「怯え」とありますが、どのようなことに怯えを感じているのですか。それを述べた二十字以上二十五字以内の一文を探し、最初の五字をぬき出しなさい。ただし、句読点を字数に含めます。以下の問題も同様です。

（十）［　　］に入れる言葉として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　能力　　イ　体力　　ウ　忍耐力　　エ　集中力

（十一）　――線部⑤「お前はもう大丈夫やで」とありますが、この時の路男の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ネギを刻む作業で包丁遣いが上達したのだから、何か他にもできるようになることがきっとあるはずだとはげます気持ち。

イ　ネギを刻む作業によって包丁本来の使い方を体にしみ込ませたので、もう使い方を誤ることはないとはげます気持ち。

ウ　ネギを刻む作業で包丁本来の使い方を身に付けたので、その達成感を自信に変えて生きていけばよいのだと諭す気持ち。

エ　ネギを刻む作業が時間をかければ上達できたように、勉強ももっと時間をかければできるようになるはずだと諭す気持ち。

（十二）　――線部⑥「ムシヤシナイさせてもらいに、オレ、何度でも来る」とありますが、これはどういうことですか。それを説明した次の文章の［　　］を二十五字以内で補いなさい。

父親にはこれからも反発を感じ続けることになるだろうが、我慢が限界に達した時には、その父親と［　　］ということ。